# オンラインシステムを用いたがん体験者参加型演習の実践
## ―COVID-19 流行下における成人看護学実習の新たな取り組み―

平　山　憲　吾[1)]　川　村　三希子[1)]　齋　若　奈[2)]　工　藤　京　子[1)]
[1)]札幌市立大学看護学部　[2)]札幌医科大学附属病院看護部

**抄録**：新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い，看護教育における臨地実習の実施形態は大きく様変わりし，多くの保健医療系大学はオンラインや学内の演習に切り替えて取り組んでいる．A 大学においても成人看護学臨地実習の補完として，オンラインシステムを利用してがん体験者に問診を行い，看護過程を学修するプログラム（がん体験者参加型演習：以下，本演習）を実施した．本稿では，本演習における学生の学びの特徴を明らかにすることを目的とする．本演習を履修した 54 名の学生のうち 49 名から回答のあったリアクションペーパーの内容について，テキストマイニングを用いて分析した．その結果，がん体験者と関わる貴重な機会が得られたこと，コミュニケーションの方法を考えることができたこと，がん体験者と関わる大切さを再認識したことなど，今後の実習に活用できることが明らかとなった．以上より，本演習は病棟実習で行う看護過程の学びを補完する学修となっており，実習形態の幅を拡げる一助になることが示唆された．
**キーワード**：成人看護学実習，オンラインシステム，がん体験者，テキストマイニング，COVID-19

# Practice of Participatory Exercises for Cancer Survivors Using an Online System: New Approaches Toward Adult Nursing Practice Under the COVID-19 Pandemic

Kengo Hirayama[1)]　Mikiko Kawamura[1)]　Wakana Sai[2)]　Kyoko Kudo[1)]
[1)]School of Nursing, Sapporo City University　[2)]Division of Nursing, Sapporo Medical University Hospital

**Abstract:** Spread of the new coronavirus infection has led to significant changes in practical training in nursing education, and many healthcare universities have switched to online and on-campus exercises to address this issue. At A University, an exercise for learning the nursing process was conducted by interviewing a cancer survivor using an online system as a complementary program to the field practice in adult nursing. The present study aimed to clarify student learning characteristics in this exercise. We used text mining to analyze the contents of the responses in the reaction papers from 49 of the 54 students who took the practical training; results showed that students gained valuable opportunities to engage with the cancer survivor, devise communication methods, reaffirm the importance of engaging with the sick, and use the experience in future practical training. In conclusion, the findings of this study indicated that this practical exercise complemented the learning of the nursing process conducted in the hospital wards and helped to broaden the range of training formats.
**Keywords:** Adult Nursing Practice, Online System, Cancer Survivor, Text Mining, COVID-19

## 1．緒言

2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症(coronavirus disease 2019：以下,COVID-19)の感染拡大は，教育現場において多大な影響をもたらした．本邦においても，感染予防対策として密集，密接，密閉といった，いわゆる「三つの密」を避けることが推奨された[1]ことにより，授業形態の変革を余儀なくされた．看護教育における現場も例外ではなく，講義のみならず，演習や実習の実施形態が一変し，2020年4月から7月に看護系大学全体では74.1％が臨地で実習ができなかった[2]ことが報告されている．

看護基礎教育課程において臨地実習は，看護の知識・技術を統合し，実践へ適用する能力を育成する[3]ための重要な位置付けとなる．しかし，COVID-19の感染拡大に伴って臨地での実習が叶わなくなり,厚生労働省は次のように通達した．

> 臨地における実践は，対象の特性にあわせて看護技術を実践する機会であることから，学内での演習により代替する場合は，シミュレーション機器や模擬患者等を用いて，日々変化する患者の状態をアセスメントする演習や,学生同士による実技演習,患者とのコミュニケーション能力を養う演習等，可能な限り臨地に近い状況の設定をし，演習を行うこと.[4]

これに則り，A大学の成人看護学臨地実習では，臨地実習の代替実習として，模擬電子カルテを用いた模擬患者事例の看護過程の展開，視聴覚教材・シミュレーション機器を用いた看護技術の習得，看護教員が模擬患者役となり学生のコミュニケーション技術を養うための学内演習など，様々な取り組みを行ってきた．これらの学習により,学生は一定の学びを得ていると実感している．しかしながら，オンラインや学内で行う学習は，臨場感が得られにくいことや，患者との双方向性のコミュニケーションができない[5]こと，個人学習の時間が多く受動的な学習となりやすい[6]ことが報告されている．このように，患者と接することができない実習形態では，学生にとってはリアリティに欠ける側面がある．したがって，模擬患者ではなく実際に闘病を続ける病者である当事者の体験を知ることが，学生の学びを深めることは想像に難くない．体験者による講義は，病の体験を知らない学生にとってストレートに，視聴覚的(体験的)に，無制限に入ってくること[7]が報告されている．今後もCOVID-19との共存が予測される中，実習形態の幅を拡げる意味においても，本演習を評価することの意義は大きいと考える．

以上より，本稿ではCOVID-19下における成人看護学臨地実習の一環として行ったがん体験者参加型演習(以下，本演習)における学生の学びの特徴を明らかにする．

## 2．方法

### 1)対象

2021年度にA大学の成人看護学臨地実習Ⅰを履修した学生は81名であった．本演習を受講した54名のうち,本演習の学びに関するリアクションペーパーに回答した49名を対象とした．

### 2)成人看護学臨地実習Ⅰの学習目標・到達目標

成人看護学臨地実習Ⅰ全体の学習目標は,「成人期にある対象を科学的視点でアセスメントし，個々の対象の健康レベルに応じた援助を実践するため，学習した技術を用いて看護過程を展開する能力を養うこと」としている．2021年度は，学内実習の目的を「病棟実習での学びを補完し，成人看護学臨地実習Ⅰの目標を達成すること」と位置づけた．具体的な到達目標としては，対象の疾病・健康レベルおよび環境をアセスメントすること，看護問題を解決するための援助方法を計画すること，対象の状況に合わせた援助を実施し評価すること，以上の3点を重点的に取り組めるようにプログラムを展開することとし，これらの到達目標を達成するために本演習を計画した．

当該学生はCOVID-19流行下の中で入学し，多くの講義や演習および実習をオンラインによる形態で受講してきた学年である．そのため，模擬患者ではなく，病を経験した人を理解し，その体験者との関わりを持つことによって，より臨場感を感じながら体験的に学ぶことが重要であると考えた．学生が主体的に学び，病者との双方のインタラクティブなコミュニケーションを実践すること，病者の反応に対してさらに学びを探求していくことは，看護過程を展開する基礎的能力を養う機会になると考えた．

### 3）成人看護学臨地実習Ⅰの概要と授業構成

成人看護学臨地実習Ⅰは，3単位(135時間)で実施されている．COVID-19流行以前は，病院実習として成人期にある患者の看護過程の展開および手術療法に関わる医療・看護チームの役割と機能について学びを深める手術室実習を組み合わせたプログラムとしていた．COVID-19の感染拡大以降は実習形態の変更が余儀なくされ，2021年度は施設の受け入れ基準に従って病棟実習のみのグループと，病棟実習と学内実習を組み合わせたグループに分かれて実習を展開した．病棟実習と学内実習を組み合わせたグループでは，各実習7日間ずつとし，学内実習では，「内科事例演習」，「外科事例演習」および本演習「がん体験者参加型演習」の3部構成とした．「内科事例演習」および「外科事例演習」では，学生は紙上事例を元に自己学習し，グループワークで学びを深めた後に，看護技術の演習を行うプログラムである．本演習では，学生は，提示された情報からアセスメントを行ったうえで，実際にがん体験者に問診を行い，得られた情報を元にアセスメントを精錬し，看護計画を立案するプログラムとした．

実習の全体スケジュールの一例を表1に示す．

### 4）本演習の学習・行動目標

本演習の要項を表2に示す．学習目標は，「がん薬物療法を受けている成人期の肺がん患者とし，患者が治療を続けながら自宅で安全・安楽に過ごすための看護展開を学修する」こととした．本演習の目標を達成するための行動目標は，成人看護学臨地実習Ⅰの到達目標を主軸としており，看護過程を展開するための対象をアセスメントする能力を強化するために考案したものである．

### 5）本演習の準備

本演習における事前準備としては，看護教員がこれまでの教育・研究活動の中で関わりのあるがん体験者1名に連絡を取り，演習の趣旨について説明を行った．演習への協力について承諾が得られた後に，事例作成と演習当日の問診のシミュレーションを行うために打ち合わせを2回行った．事例作成では，看護教員が性別，年代，現病歴，治療歴，日常生活状況，職業，家族構成，血液検査データなどについて情報を得た．これらの情報をもとに学生の学修状況に合わせて改変し，事例(表3)を作成し，さらにはゴードンの看護概念モデルをもとにした11の機能的健康パターンのアセスメントフレーム(一部事例情報を入れたもの)を学生の課題として設定した．

### 6）本演習の方法

本演習は，学習の順序性を考慮し以下の通りで実施した．①事前学習，②病棟実習単位の学生グループでアセスメントと関連図作成のためのグループワーク，③問診に向けた情報の整理，④問診の実施，⑤病棟実習単位の学生グループでアセスメントフレームの完成と支援内容の検討のためのグループワーク，の構成とした(表4)．アセスメントフレームについては，提示した事例における「情報」および機能的健康パターンの中で健康知覚－健康管理パターン，栄養－代謝パターン，活動－運動パターン以外の「アセスメント」をすでに記載したものを準備し，学生は上記3パターンについてアセスメントを行う課題を設定した．

①の事前学習については，肺がんの特性，病期，標準治療，薬物療法の理解，副作用症状の理解について個人学習を提示した．②のグループ単位によるアセスメントと関連図作成のためのグループワークでは，提示された事例情報に基づき，健康知覚－健康管理パターン，栄養－代謝パターン，活動－運動パターンのアセスメントを記載してもらい，さらに1枚(60cm×80cm)のシートに関連

**表1　実習全体のスケジュール**

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1週目 | 病棟実習 | 病棟実習 | 病棟実習 | 病棟実習 | 病棟実習 |
| 2週目 | 病棟実習 | 病棟実習 | 祝日 | 内科事例演習 | 内科事例演習 |
| 3週目 | 手術室実習 | がん体験者参加型演習 | がん体験者参加型演習 | 外科事例演習 | 外科事例演習 |

**表 2　がん体験者参加型演習要項**

| 学習目標 |
| --- |
| がん薬物療法を受けている成人期の肺がん患者とし，患者が治療を続けながら自宅で安全・安楽に過ごすための看護展開を学修する． |
| **行動目標** |
| 1.肺がんの病態生理，治療，予後について説明できる |
| 2.疾患が患者の身体・心理・社会的側面に及ぼしている影響について考えることができる |
| 3.がん薬物療法が患者に及ぼす身体，社会，生活面への影響をアセスメントできる |
| 4.患者が安全・安楽に自宅療養を継続するためのアセスメントに必要な情報を列挙できる |
| 5.援助的コミュニケーションを取りながら，必要な情報を収集することができる |
| **課題（1 日目）** |
| 1.ゴードンのアセスメントフレームに基づき必要な情報を追加する（健康知覚－健康管理，栄養－代謝，活動－運動パターンを中心に） |
| 2.関連図を描き，各領域の問題がどのように関連しているのかを考える |
| 3.不足している情報を整理する（なぜその情報が必要なのか根拠も考える） |
| **課題（2 日目）** |
| 1.問診を通して，必要な情報を意図的に収集する |
| 2.問診を通して得られた情報を解釈・分析する |
| 3.健康知覚－健康管理，栄養－代謝，活動－運動パターンの結論を導く |
| 4.看護問題をあげる（可能なら） |

**表 3　事例の概要（一部改変）**

| |
| --- |
| Bさん　50 歳代　女性 |
| 20XX 年に肺腺がん StageⅣと診断された．これまで細胞障害性抗悪性腫瘍薬の治療を受けてきたが，20XX 年＋Y 年の Z 月から分子標的治療薬によるがん薬物療法治療を外来にて開始した．治療後から，関節痛，便秘，眠気，倦怠感などの症状が出現しているが，2 週間に 1 度の外来通院にて経過をみている． |
| 【日常生活状況】関節痛や倦怠感に伴う苦痛はあるが，身の回りのことは自分で行うことができている． |
| 【仕事】ボランティア活動をしている． |
| 【家族構成】娘 1 人，息子 2 人 |
| 【場面設定】本日は定期の外来受診日であったが，感染防止対策として，オンラインで問診することになった． |

図を描くことによって各機能パターンの問題がどのように関連しているかについてディスカッションをした．③の問診に向けた情報の整理では，②の学習から得られた不足している情報の抽出，問診に向けた質問内容の検討を行った．問診実施前には，各グループで検討した質問内容を全体で共有し，看護教員の指導のもとでさらに深めた．④の問診の実施については，あらかじめ各グループより問診担当者を 1-2 名決定し，③で検討および修正した質問について意図的に質問をした．問診は，実習プログラムに応じて 1 日あたり 3-4 グループ毎に実施し，最終的に 20 名程度の学生が問診を担当した．問診する学生はカメラの前に移動し，一対一で行い順次交代して進めた．学生は講義室から，がん体験者は自宅からオンラインシステムを接続することによって感染対策を講じながら実施した．最後に，がん体験者より問診を受けたことに対するフィードバックを学生に行っ

**表 4　がん体験者参加型演習の方法**

| 演習 | 時間（分） | 内容 |
|---|---|---|
| 1 日目 | 10 | 出席確認/健康チェック |
| | 10 | ガイダンス |
| | 100 | 事前学習（肺がんの特性，病期，標準治療，薬物療法の理解，副作用症状の理解） |
| | 80 | 実習病棟毎にグループワーク（関連図の作成）<br>“どこでもシート”に記入し全体で共有する |
| | 20 | 必要な情報の整理・まとめ |
| 2 日目 | 10 | 出席確認/健康チェック |
| | 10 | ガイダンス |
| | 30 | 各グループの問診内容の全体共有・問診担当者の決定 |
| | 10 | 問診の準備 |
| | 30 | 問診の実施（Zoom） |
| | 60 | 実習病棟毎にグループワーク（情報整理，アセスメント，支援内容の検討） |
| | 60 | 記録 |

た．

### 7）学生の学びの分析対象

本演習終了後，Microsoft Forms を用いて演習の学びに関するリアクションペーパーの記載を依頼し，回答が得られた 49 件を分析対象とした．

### 8）学生の学びの分析方法

Microsoft Forms によるリアクションペーパーは，「演習の学習目標を達成できたか」，「演習に興味・関心を持つことができたか」の質問については単純集計を行った．学びに関する自由記述のテキストはデータ化し，テキストマイニング解析処理ソフトである KH Coder（Ver.3.）を用いた[8)9)]．KH Coder を用いた分析は，テキストを計量的に分析することで語のまとまりや関連性を可視化できるため，質的データの整理と傾向について示唆が得られると考えられる．学生の学びに関するデータの分析過程においては，がん体験者に問診を行っていることから，語の取捨選択では「患者」は重要な語であると判断し，強制抽出する語として指定した．その上で頻出語リストを作成した．共起ネットワーク分析では，最小出現数を 5 とし，共起関係に強い関連があるとされる Jaccard 係数 0.2 以上の図を描画した．Jaccard 係数は，目安として，「0.1」以上で「関連がある」，「0.2」以上で「強い関連がある」，そして「0.3」以上で「とても強い関連がある」とされる[10)]．さらに，同じ色で結ばれている語を一つのグループとしたサブグラフにおいて，共起関係が示されている語群について KWIC コンコーダンスを用いてテキストデータでの文脈を確認し，カテゴリー化を行った．

### 9）倫理的配慮

本研究で使用した本演習のリアクションペーパーは，成績とは関連付けず，学生の自由意思に基づいて取得した．リアクションペーパーは無記名でオプトアウトができないため，研究目的と意義，研究方法についてポスターを掲示して一定期間公開周知した．本研究は，札幌市立大学倫理委員会の承認を得て実施した（No.2234-1）．

なお，がん体験者には，本演習の打ち合わせにおいて収集した情報は学生が学修しやすいように改変して提示すること，本演習に関する教育評価について報告することについて承諾を得た．さらに，打ち合わせや演習当日には体調が優れない場合はすぐに中止できることについて配慮し，演習後には体調変化がないか確認した．また，演習時に撮影した写真の掲載については，学生とがん体験者各々から承諾を得た．

## 3．結果

### 1）学習目標の達成度および演習への興味・関心

COVID-19 下における成人看護学臨地実習において，オンラインシステムを用いた本演習を履修した A 大学の学生 54 名を対象に，行動目標の達成度，演習に対する興味・関心，演習を通して得た学びについて，Microsoft Forms を用いた選択式および自記式のリアクションペーパーの記載を依頼した結果，49 名から回答が得られた（回収率 90.7％，有効回答率 100％）．看護を展開するうえで必要なアセスメントについて，グループワーク後の関連図の発表およびオンラインシステムを用いた問診場面を図 1 および図 2 で示す．

演習に対する興味・関心を持つことができたかという質問について，全対象者が「できた」もしくは「まあまあできた」と回答した（図 3）．また，行動目標の達成度を図 4 に示す．目標 1-5 に対して，1 点（達成できなかった）－4 点（達成できた）の 4 段階で自己評価した結果，すべての項目において 90％以上が「達成できた」もしくは「まあまあ達成できた」と回答した．

図 1　グループワークおよび関連図の発表

図 2　オンラインシステムを用いた問診場面

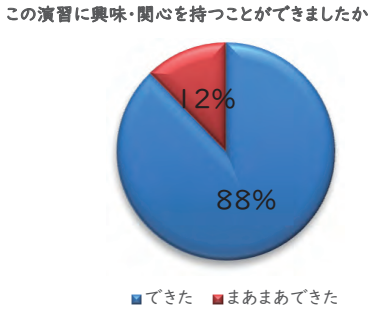


図 3　演習に対する興味・関心

### 2）学生の学びに関する結果

学生の学びについて，KH Coder を用いて頻出語リストによる頻出語の確認および共起ネットワークの作成からカテゴリーを作成した．分析対象のテキストデータに含まれる語の延べ数である総抽出語数は 4,021 語，何種類の語が含まれているかを示す数である異なり語数は 626 語であった．このうち，分析に使用された総抽出語数は 1,497 語，異なり語数は 477 語であった．頻出語の結果については表 5 に示す．

表 5　頻出語の結果（上位 20 語）

| 順位 | 頻出語 | 出現回数 |
|---|---|---|
| 1 | 患者 | 48 |
| 2 | ありがとう | 40 |
| 3 | 思う | 28 |
| 4 | インタビュー | 24 |
| 4 | 聞く | 24 |
| 6 | 実際 | 21 |
| 7 | 質問 | 19 |
| 8 | お話 | 18 |
| 9 | 感じる | 17 |
| 10 | 今回 | 15 |
| 10 | 生活 | 15 |
| 10 | 問診 | 15 |
| 13 | 貴重 | 14 |
| 14 | 学ぶ | 13 |
| 15 | 情報 | 12 |
| 16 | 考える | 11 |
| 17 | 機会 | 10 |
| 17 | 答える | 10 |
| 17 | 話 | 10 |
| 20 | 時間 | 9 |

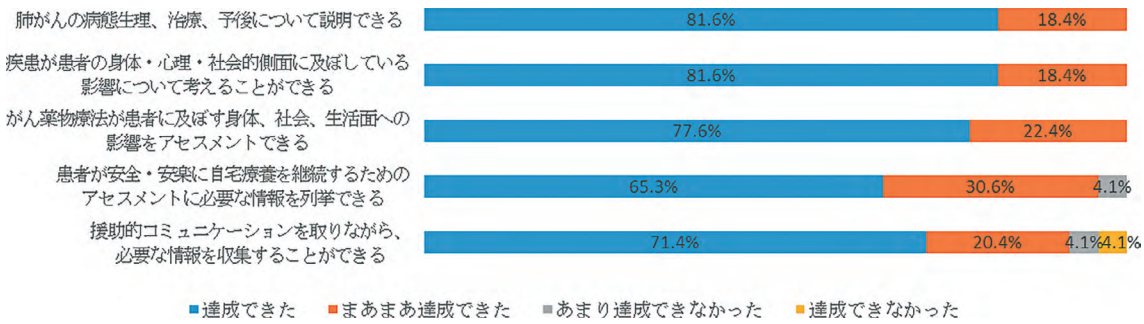


**図 4　行動目標の達成度**

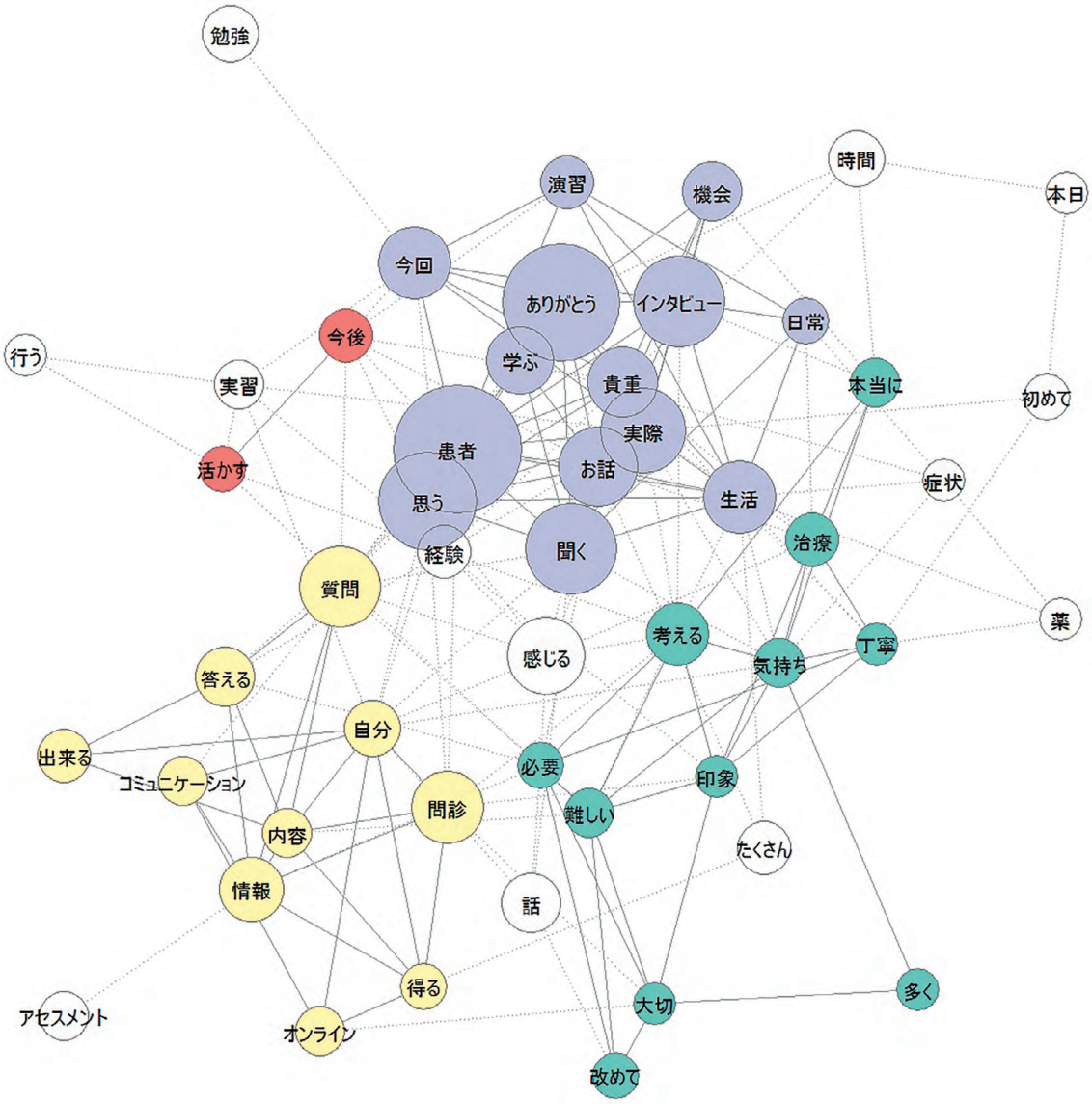


**図 5　学生の学びに関する共起ネットワーク**

以上の結果を踏まえて，演習における学生の学びの特徴について共起ネットワーク分析を実施した結果，4 つのサブグループに分けられた(図 5)．これらのサブグループで示されている語群について，KWIC コンコーダンスを用いてテキストデータを再確認し，カテゴリー化を行った．以下，サブグループを【　】，テキストデータを斜体で示す．

その結果，【がん体験者と関わる貴重な機会】，【オンラインによるコミュニケーション方法の獲得】，【病者と関わる大切さを再認識】，【今後の実習への活用】の 4 つのカテゴリーが抽出された．

【がん体験者と関わる貴重な機会】では，「*オンラインという形であったため対面とは違う環境ではありましたが，その分，オンラインでの問診に*

*おいて求められる対応について学ぶことができ，貴重な機会だったと思います．ありがとうございました．*」，「*実際に患者さんに対して必要な情報を収集する，ということが初めてだったので，緊張しましたが，非常に貴重な経験をすることができました．*」などの記述がみられた．

【オンラインによるコミュニケーション方法の獲得】では，「*問診の時間は短かったにもかかわらず患者さんがどんな方なのかすごく伝わってきたため，患者さんと積極的にコミュニケーションをとることの大切さを実感することが出来ました．*」，「*オンラインでのインタビューで，対面よりも表情やリアクションの表現を大きくしたり，声の大きさなどを気をつけたりしなければならないことなど，援助的コミュニケーションの方法について学ぶことができました．*」などの記述がみられた．

【病者と関わる大切さを再認識】では，「*患者さんが私たちの一番の先生だと改めて感じるがん患者インタビュー演習になりました．*」，「*実際の患者さんからお話を聞く機会は少ないため凄く学びにつながりました．プライバシーに関わる話もあったのですが，質問の前に前置きをすると負担を感じないということや患者さんの話している時の態度などを改めて理解することができました．*」などの記述がみられた．

【今後の実習への活用】では，「*紙の事例以外で実際に問診を行ったのが初めてだったのでどのように問診を進めていけば良いのかを考えるとても良い機会となりました．この経験を実習に活かしたいと思います．*」，「*一つの質問に対して，いろいろなことを伝えてくださって患者像の理解につながりました．今回学んだことを今後の実習や学内での演習に活かしていきたいと思います．*」などの記述がみられた．

## 4．考察

本演習によって得られた結果より，学生が病を経験する体験者と関わる学修における学びの特徴について述べていく．

### 1）看護過程の学修における学びの特徴

成人看護学臨地実習Ⅰの学習目標として，成人期にある対象を科学的視点でアセスメントし，個々の対象の健康レベルに応じた看護過程を展開する能力を養うことである．菱沼ら[11]によると，COVID-19状況下での保健医療系大学の臨地実習に代わる対応として，オンラインによる紙上事例の看護展開や，教員が模擬患者を演じた実習がほとんどであったと述べている．模擬患者を演じる演習については臨場感を演出することは可能であるものの，患者・家族との関わりからコミュニケーション技術を習得するといった，現場ならではの学習効果を学内実習で得ることには限界がある[12]ことも指摘されている．看護過程を展開するためには，患者に出現している症状や臨床検査の結果を関連付けることによって病状の理解に繋げていくことが必要である．今回，A大学の学内実習において実施したがん体験者参加型演習では，がん体験者から得られた病歴，症状，臨床検査の結果などの(改変した)情報を提供し，さらには，それらの情報を元に問診を実施したことによって，不足していた情報収集の追加，アセスメントの実施および必要な看護支援を考えるプロセスについて学ぶことができた．そして，【がん体験者と関わる貴重な機会】として，「*オンラインでの問診において求められる対応について学ぶことができ，貴重な機会だったと思います．*」と回答した学生の学びからもわかるように，オンラインであるがゆえに情報収集の方法に工夫を凝らすことを考える機会にもなっていた．このように，臨地実習に代わる学内実習においても，リアリティを追求した看護過程の展開を実施できたことによって，多くの学生が行動目標を達成することができたと考える．馬場ら[13]は，成人看護学慢性期における遠隔式学内実習として，地域の診療所に通う患者の協力を得てZoomによるコミュニケーションを図る演習を行い，患者を観察することの重要性や患者との深いコミュニケーションをとることの大切さを明らかにしている．本演習の大きな特徴は，オンラインシステムを用いて実際の患者と関わっていることであり，COVID-19下において学生が病者と関わる経験を積み重ねていく一助になったと考えている．

一方で，行動目標の一つである「援助的コミュニケーションを取りながら，必要な情報を収集することができる」については，1割程度の学生は「あまり達成できなかった」もしくは「達成できなかった」と回答していた．その要因の一つとして，本行動目標の設問が「援助的コミュニケーショ

ンを取ること」および「必要な情報を収集できること」といった1つの評価に2つの項目を評価する設問になっていたことによって回答に影響したと考えられる．しかしながら，本演習で設定した5つの行動目標について，全ての項目で9割以上の学生が「達成できた」もしくは「まあまあ達成できた」と回答していることからも，多くの学生が臨地で行われる病棟実習で展開する看護過程の学びを補完するという目的に沿った内容を学修できたと評価している．

### 2）がん体験者と関わる学修と今後の実習への活用

現在もCOVID-19の収束が見通せない中，今後も臨地実習の遂行が困難になることが予測される．その状況下において，【病者と関わる大切さを再認識】された内容として，「*患者さんが私たちの一番の先生だと改めて感じるがん患者インタビュー演習になりました.*」と述べられていた．伊藤[14]は，インタビューを実施することによって，言葉以外の感覚的な情報からも患者像を捉えられることや，声質や姿勢から患者の気持ちや体験を読み取ることができると述べている．つまり，がんを患う病者とコミュニケーションを図ることができた本演習は，学生にとっては臨地実習において患者と関わる際のイメージ化の促進に寄与していたと考えられる．また，COVID-19の感染拡大以降，多くの大学が学内実習として取り入れている模擬患者や紙上事例による学習においては，患者と直接コミュニケーションをとることができない中で，患者の心情や苦悩を理解できるよう伝えるのが困難[15]であるという学内実習の限界も報告されている．しかしながら，【オンラインによるコミュニケーション方法の獲得】として，「*対面よりも表情やリアクションの表現を大きくしたり，声の大きさなどを気をつけたりしなければならないことなど，援助的コミュニケーションの方法について学ぶことができました.*」と述べられたように，模擬患者や紙上事例での学習の限界を補完するための演習として有効であったと評価できる．このように，短い時間ではあったが，病者の生の声を聴き，双方向のコミュニケーションを図ることができたのは，臨地実習のリアリティを擬似的に体験する機会になったと考えられる．

本演習による学びを得たことにより，多くの学生から【今後の実習への活用】に繋げたいと肯定的な意見がみられた．それは，これまで述べてきたように，対象を理解するために思考を巡らせる学習ができたことや，病者と接する際のコミュニケーションに工夫を凝らしたこと，そして臨地実習ならではの学びに近い体験ができたことなどであり，実習に対する前向きな姿勢に繋がる演習になったこと，および実習形態の幅を拡げることができたことは評価できる．一方で，本演習に協力いただいたがん体験者は，看護教員がこれまでの教育・研究活動において関わったことのある方であり，実際の患者との調整を含めた実習環境を整えるまでには多くの時間を要した．また，今回は学生に行ったリアクションペーパーの分析のみであり，演習に対する客観的な評価を行っていないことは今後の課題である．

## 5．結論

2021年度におけるA大学の成人看護学臨地実習Ⅰの補完として，学生がオンラインシステムを利用してがん体験者に問診を行い，看護過程を学ぶ新たな演習を実施することができた．学生の学びとして，病棟実習で行う看護過程の学びを補完する内容であったこと，臨地実習のリアリティさを擬似的に体験する機会となった．今後もCOVID-19との共存が予測される中で，本演習は病棟実習で行う看護過程の学びを補完する学修となっており，実習形態の幅を拡げる一助になることが示唆された．

### 謝辞

A大学看護学部の成人看護学臨地実習Ⅰにおける本演習にご協力くださった「北海道肺がん患者と家族の会 代表 内山浩美 様」ならびに関係者の皆様に心より御礼を申し上げます．

### 文献

1）内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室：「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」2020.（令和2年4月7日改正）https://corona.go.jp/expert-meeting/pdf/kihon_h_0407.pdf（2022年10月7日アクセス）
2）日本看護系大学協議会：「新型コロナウイルス感染症拡大の影響により臨地実習に影響を受けた令和3年度新人看護職研修の支援に関する要望書」2020. https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/08/youbousyo-MHLW20200825.pdf

(2023 年 2 月 14 日アクセス)
3)文部科学省:「看護学教育モデル・コア・カリキュラム〜「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標〜」2017 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf(2022 年 10 月 7 日アクセス)
4)厚生労働省医政局看護課:「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について」2020, p.3. https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf(2022 年 10 月 7 日アクセス)
5)園田希, 西山陽子, 苑田裕樹, 原田紀美枝, 大重育美, 倉岡有美子:オンラインによる 4 年次科目「看護の統合実習」の企画. 日本赤十字看護学会誌 23(1):1-8, 2022
6)岡美雪, 五十嵐ゆかり, 下田佳奈:オンライン実習プログラムを用いた周産期看護学実習の取り組み. 聖路加国際大学紀要 8:81-86, 2022
7)松下年子, 木谷久美子:看護学教育における当事者講義の有用性:看護学生を対象としたフォーカス・グループインタビューの結果より. 埼玉医科大学看護学科紀要 5(1):9-15, 2012
8)樋口耕一:社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―. 第 2 版, ナカニシヤ出版, 京都, pp.1-49, 2020
9)樋口耕一:KH Coder 3 リファレンスマニュアル. 2021. https://khcoder.net/dl3.html(2022 年 10 月 14 日アクセス)
10)末吉美喜:テキストマイニング入門―Excel と KH Coder でわかるデータ分析―. オーム社, 東京, pp.212-216, 2019
11)菱沼典子, 菅原啓太, 上田貴子, 小池敦, 大川明子:COVID-19 状況下での保健医療系大学の遠隔授業・臨地実習の対応―公立大学協会看護保健医療部会による調査結果から(第 3 報)―. 三重県立看護大学紀要 特別号:43-47. 2020
12)大釜信政:COVID-19 感染拡大状況下における成人看護学慢性期実習の新たな試み. 帝京大学総合研究センター紀要総合学術研究 4:27-32, 2021
13)馬場才悟, 大庭悠希, 南里真美, 川島睦子, 大島勝也, 重松直也, 鷹居樹八子:COVID-19 状況下での成人看護学慢性期における遠隔式学内実習に関する学修効果. 西九州大学看護学部紀要 3:9-15, 2022
14)伊藤加奈子, 唐津ふさ:COVID-19 流行下における成人看護学実習学内代替実習プログラムの評価. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 18(1):65-74, 2022
15)中村織恵, 佐々木純子, 永海雄太, 外舘真理子, 荒木玲子, 須田利佳子:コロナ禍における成人看護学実習(第 2 報)―成人期にある対象への看護を遠隔実習で理解するための取り組み―. 東都大学紀要 11(1):73-83. 2021